慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 綜合經濟史(加藤繁譯, 大鐙閣發行) |
| Sub Title | |
| Author | 宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1929 |
| Jtitle | 史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.154(662)- 155(663) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0154 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が出來ると思ふ。兎に角、讀書子の座右に缺く可からざる良書たることは疑ない。（今宮　新）

## 綜合經濟史（加藤繁譯　大鐙閣發行）

米國風指の經濟史專門家であるグラス教授の〔An Introduction to Economic History〕が、今回支那經濟史の權威加藤博士によつて邦譯さるるに至つたことは、學界のため寔に祝福すべき事といはなければならぬ。著者は嘗にミネソタ大學で經濟史の教授を勤め、後ハーバート大學の商業史の教授に轉じ、現に其の職に在る人である。原著は其の專門の學殖に教授の經驗を加へ、大學の教科書として、一般の讀物として、且又、ハーバー歷史叢書の一として、一九二二年刊行されたもので、其の論及の對象は原始人民から現時の最高文明國に亘つてゐる。而して本書の目的は、著者の言の如く、經濟史の編年的詳述ではなくして、寧ろ經濟發達の段階を取扱つた總括的序說を行ふにある。即ちかゝる見地から著者は人類の未だ定住しない時代の經濟狀態を採取經濟、農牧遊動經濟とし、定住した後の其れを村落經濟、都市經濟、大都市經濟とし其の發達の過程を五段階に分つてゐる。

第一章採取經濟に於て、著者は採取狀態にある民族に共通な諸多の特質を述べてゐる。

第二章農牧遊動經濟に於て、著者は此時代には人間の仕事の種類が殖え、彼等の時間の全部が日々の食物を得ることに費されなくなり、從つて製造、交易、戰爭に使はれる時間が增してきたことを述べ、此時期の人類の特徵として三つの經濟的慣習が擧げられる。（一）植物か動物の一方又は兩方を養育したこと、（二）彼方此方と移動したこと、（三）飼育培養の傍ら採取的の仕事をしたこと、此の三つであると云つてゐる。

第三章定住村落經濟に於て、漸進的にまた滑り勝に、農牧遊動民が土地に定住するに至つたことを記し、次に村落の形態、定住村落經濟第一期である自由村落及び第二期である從屬村落について述べ、最後に傑出せる社會團體である都市的村落について叙してゐる。

第四章都市經濟に於て、先づ都市と村落の對抗につき記し、次に都市の形態、前期の都市ともいふべき商業都市、後期の都市ともいふべき商工都市につき述べ、最後に都市の文化的進境に於て「何と言つても都市經濟の一切の業績中、最も著大なものは個人主義の開發であつた。個人主義は自己保存といふ幼稚な形に於て夙に存在したのであるが、今や都市に於て、夫は自己表現を、即ち最も善く自己の生活を生きることを意味するに至つた。此の主義は都市と共に生長したといふよりも寧ろ都市の裡から發育したのであつて、初期都市よりも多く後期都市の方に見出される云々」と叙してゐる。

第五章大都市經濟――主として英國に於ける、第六章大都市經濟――主として米國に於ける――に於ては著者は明快に其の組織を論述し此の一段階を立てて、現代の經濟を說明することの妥當なることを主張してゐる。

要するに、本書は米人の著はした經濟書、地理書によく見るや

うな米國本位に比較的陷つてをらず、其の取扱つた國民は古今東西文明未開各方面を網羅し、歐米諸國の外、印度もあれば、支那もあり、亞弗利加南洋の蠻族もある。而して本書に載せられた文獻は本書の基礎をなすもので、上は希臘羅馬の古典より下は現代歐米諸國の各種調査報告にまで及んでゐる。全章に亘り、著しい見解に度々接することは出來なくとも、此の豐富な資材を活用し複雜な事象をよく整理し、綜合して巧みに前記五段に歸入せしめた點に敬意を表しないわけにはゆかぬ。加ふるに譯文平易明快、一氣に讀了せしめなければ止まない。尙ほ書中の支那に關した事項については、博士は卷末に補註を特設し、解說を施されてゐるが、これまた錦上更に花を添うるの觀がある。

嘗て義塾文學部の一學生として博士の講筵に列するの榮を得た余は、今や本書を手にし、欣快の情に堪へず、研鑽日尙淺き身にも拘はらず、敢てかゝる蕪雜な紹介を試み、本書を江湖に推奬する次第である。（宮島貞亮）

## 熾仁親王行實（高松宮御藏版）

幕末より明治初期にわたつての有栖川宮熾仁親王の御偉勳は實に赫々たるものである。東征大總督、福岡藩知事、元老院議長、西南の變の征討總督、日清戰爭當時の參謀總長としての御活躍は何人も記憶する所である。

すでに、親王の御事歷は明治三十一年宮內省の命に依り熾仁親王行實十五卷となつて刊行されてゐるのである。然しこの本は根本史料の蒐集保存を主とし、資料の全文を其儘引抄してある爲に專門歷史家の參考とはなるが、一般世人の閱讀には不便である。なほ其の上非常に浩瀚なものであり印刷部數もわずかに數十に過ぎないので今日に於ては之を得ることが困難である。大正十二年有栖川宮廢絕と共に高松宮がその祀を繼がせらるゝことゝなり、同宮は前記の熾仁親王行實を改めて、通俗易解を旨として編述することを命ぜられた。そこで平山成信、杉榮三郎兩氏が顧問となり、武田尙氏が幹事、久保得二、芝葛盛、布施秀治、武田勝藏の四氏が編修となつて昭和二年二月より編修に著手し、同四年八月に至つて完成し、直ちに出版されたものである。

本書編修の本旨は主として舊行實に準據したものであるけれども、引用文書は何れも出所を正し、その原文に從つたが讀み易からしむる爲に多少文字を改め、送り假名等を加へ、又關係の諸官街社寺を始めとし、德川、池田、溝口、常盤井等の御親戚、及び北畠男爵等より從前殆ど遺却された文書類を採錄し、又維新前後竝に明治時代の史實に關する著書は概れ參照し、又、陸軍大將安東男爵を始め舊有栖川宮家扶等親王に朝夕陪侍した數氏の談話を聽取したと言ふ。更に舊行實出版の際は、事の機密に亂する爲め或は直言を避け、或は故らに省略したものも少くなかつたが本書を編修するにあたつては時世がすでに過ぎてゐるので特に忌諱の必要ないものは悉くこれを記入したと言ふ。かくして本書は舊行實の面目を一新して通俗平易に書き改められるゝに至つたのである。

本書は菊版上下二卷、裝紙には宮家の御紋章を付し、題籤は